



## よりよい世界のために

石川県立金沢泉丘高等学校 3年 堂前 新太

私は最近、久しぶりに「アラブの春」という言葉を耳にした。そういえば、そんなこともあったなあと思っていたが、続けて報道されたイスラム過激派組織（IS）のニュースを見て、ふと疑問に思った。ISに関する報道は毎日のように耳にするが、確かこれは、アラブの春の時と似ている。もしかしたら、ISも少し時間が経つと、忘れ去られてしまうのかもしれない。

アラブの春が起きたのは、2010年末のことである。チュニジアで始まった民主化を求める運動を皮切りとして、北アフリカや中東のアラブ諸国に民主化要求運動が一気に波及したのである。エジプトのムバラク政権、リビアのカダフィ政権などの多くの長期独裁政権が崩壊した。これは遠い日本の地でも連日報道されたが、政権の崩壊をもって、徐々に報道は少なくなっていった。

私たちの多くは、これで多くの国々が民主化に成功し、平和な日々を取り戻したのだと思っている。しかし、それは違った。多くの地域では未だに混乱が続いているようだ。アラブの春は、純粋な民主化運動を美化できるものではなく、かえって市民に多くの厄災をもたらしているという批判まで出ているうそうだ。私アラブの春に対して抱いていた好意的なイメージは崩れ去った。

民主化を実現することは極めて困難なものであると痛感した。たまたま豊かですでに民主化されている国、日本で生まれた私にとっては他人事のようにあって、そうでないように思える。もし、私たちが日本は、民主主義の国であることに安心しきって、政治は一部の人に任せるだけで、自分には関係のないような態度をとり続けていたら、気付いたときにはすでに、民主主義ではなくなり、独裁的な政権へと変わっているかもしれない。

世界中で起こっている出来事をただ傍観しているだけではよくない。その出来事を通じて学ばなければならないことはたくさんある。

では、私たち一人一人が世界のためにできることは何だろうか。もちろん、私たちが紛争地域などに直接行って、それを止めさせるというのは無茶なことである。まず、私たちができることと言えば、「知る」ことである。今、世界で何が起き、それがなぜ起こっているのかを知ることが学生である私たちができる最大限のことだと思う。

昨今の国際化は、経済や文化のことばかりに目を向けられているが、原点に立ち返って考えると、国際化とは思いやりである。世界情勢を知ることと思いやりの一つであると私は考える。

だから、私は大学では世界について学びたいと考えている。漠然的な目標ではあるが、これが今の私がよりよい世界のためにできることだと思う。そして、これが日本という恵まれた国で生まれた私の使命である気がする。

私たちがよりよい世界のためにできることは何か。それは世界を知ることであり、世界について考えることだ。それが、直接世界の何かの助けになるわけではないかもしれない。しかし、それが私たちのできることであり、きっと将来役に立つはずだ。